

芦屋大学論叢 第73号
(令和2年9月16日)抜刷

母親としての役割認識による育児行動の変容

—母親概念と自己評価に着目して—

大 谷 彰 子

母親としての役割認識による育児行動の変容

—母親概念と自己評価に着目して—

大谷 彰子

抄録

母親アイデンティティの精神的受容の認識ごとに、自己評価や母親概念を分析し、その意識差が育児行動に与える影響を明らかにすることを目的とし、820名の母親を対象に調査し検証を行った。母親認識していない母親は、未熟な準備期としての子ども観を持ち、子どもを変容させることが母親役割であると、他人に迷惑をかけないための他律的で指示的な育児を行っている。母親認識「どちらでもない」の母親は、母親概念を描けておらず、子どもに他者と関わる経験値を上昇させると共に、自身も自由と自己充実を求めている。母親意識が醸成された母親は、子どもを信じて他者貢献の意識を育てる自律的な行動規範を持っている。そして、自身が生き方モデルとして側面的な援助をし、母親としての自信を得た前向きな育児を行っていた。

1. 目的

育児とは、「乳幼児の身体的・精神的な成熟を助け、社会に適応する能力をつちかうこと」¹⁾であるが、子どもが社会的に独り立ちする年齢が高くなるにつれ、乳幼児期だけでなく思春期、青年期までもを含め、親元から離れ自立するまでの極めて長い期間、母親は子育てに費やすようになっていく。また、今日、女性のライフコースは多様化し、様々な社会的役割や家庭的役割を担い、複数のアイデンティティを自己の内部で統合しつつ生きることが求められている。このことは、1971年に山村が定義した日本人に特徴的な母親としての概念「自分を無にしてすべてを捧げて子に尽くし、子どもを生き甲斐とする母の姿」²⁾を現代の女性が自身の概念とし子育てすることの難しさに繋がっている。

女性の成人期の発達について、岡本は『『個の確立』』といった既存モデルを女性の発達に当てはめようとするすると矛盾やズレが生じ、『関係性の維持』という視点から検討することが必要不可欠である。³⁾としている。また、女性の心の発達を、「人生の岐路に遭遇するたびに、これまでの自己のあり方や生活構造の破綻や破れに直面し、一時的な混乱を経て再び安定した自己のあり方が形成されていくという「危機⇒再体制化⇒再生」の繰り返しのプロセス」⁴⁾として捉えるようになってきている。「個のアイデンティティが、乳幼児期からの重要な他者との数々の同一化の選択と統合の結果として獲得されるのに対して、母親アイデンティティは、母親役割の反映として獲得」⁵⁾されている。母親にとって子どもを産み育てる経験は、相反する価値や評価を同時に経験し、自分自身を評価しながら、母親役割を獲得し、アイデンティティを構築するプロセスにあるといえる。

母親になることに伴う人格の発達や変容については、柏木らが、親になることでの発達の6つの側面として、「柔軟さ、自己抑制、運命・信仰・伝統の受容、視野の広がり、生き甲斐・存在感、自己の強さ」⁶⁾をあげている。これらの因子の中には『『人間ができていく』』といった人格的に高い水準にあると判断する際の暗黙の基準として、これまで人格の発達・成熟の概念で捉えられてきたものが含まれており、「育

自」とはこのような人格発達・成熟に至る営みである」と定義づけている。山口は、親としての役割や意味が付与され、社会的にも親としての態度や行動が要求されるようになるという過程を「親同一性」という視点から検討⁷⁾している。また、柏木らは、「親となる」ことによって生じる人格的・社会的な行動や態度に関する変化について「親の発達尺度」⁸⁾を、大日向も、母親であることを肯定的または否定的に捉える母親役割受容に関する「母性意識尺度」⁹⁾を作成している。

その母親役割の定義について、中垣らは「母親であることを受容し、親としての行動がとれること」¹⁰⁾、稲田らは「母親が子どもに対して適切な養育行動がとれるための能力を獲得し (Mercer) 子どもの母親としての自己を受け入れ、子どもとの絆を形成していく過程 (Rubin)、つまり母親役割獲得過程において、発揮される母親の認識や能力」¹¹⁾であるとしている。また、二川らは、「子どもとの相互作用を通して、自身の成長のために葛藤し、母親としてのアイデンティティを積み上げること」¹²⁾と定義づけている。そして、その母親役割を担う上での行動について、三澤らは、「子どもを迎えるためにとられる具体的な準備行動」¹³⁾といった妊娠出産時期の子どもを授かる前の行動をあげており、前原らは、「母親が我が子に対してとった一連の言動と態度であり、授乳やおむつ交換等の世話、我が子への語りかけや接触などのコミュニケーションを含んでいる。また、その場面において母親が表現した育児行動に関する判断の過程を含むもの」¹⁴⁾であるとしている。盛山らは「母親としての役割意識と行動。母親役割を獲得するという事は、気持ちのみではなく、実際に行動が伴っていることが重要であると考え、母親役割意識と行動の両面を含め、子を産み育てる役割、健全な母子関係を形成するための親の意識の高まりや行動の遂行」¹⁵⁾であると、意図や行動することで醸成される母親役割意識をも含めて定義づけしている。

その育児行動に関する研究については、父母の育児行動の比較に関するもの (加藤ら 2020¹⁶⁾、大澤 2020¹⁷⁾、多田ら 2014¹⁸⁾、佐藤ら 2012¹⁹⁾) や育児ストレスと母親の育児行動に関するもの (片山ら 2019²⁰⁾、山下ら 2016²¹⁾、中谷ら 2014²²⁾、池田 2011²³⁾、加藤ら 2009²⁴⁾) 等が認められる。しかし、女性たちに母親役割意識が醸成され、その認識の差異による母親観や、育児行動の違いに関する論文は殆ど見当たらない。この検証することは、母親の生涯発達の観点や子育て支援において意義深いと考える。

そこで本研究では、母親アイデンティティの精神的受容の認識ごとに、母親としての自己評価や母親概念を分析し、その意識差が育児行動にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 対象者

NPO 法人ママの働き方応援隊に所属する母親 (教育機関や高齢者施設、企業などにおいて乳幼児ふれあい体験を行う母親) を対象に、Web 上でのアンケート調査を依頼した。回答率は、会員 2702 名中 820 名 (30.3%) であった。アンケートは 100%有効回答であった。

2.2 対象者の属性

対象者の属性は、30 歳代が 74.1%、40 歳代が 18.0%、29 歳以下が 6.8%である。子どもの数は、2 人が 46.7%、1 人が 30.5%、3 人が 19.0%、4 人以上が 3.8%、第一子の年齢は、3~5 歳が 45%、1~2 歳が 23.4%、小学生が 20.2%、0 歳が 6.0%、中学生以上は 5.4%である。最終学歴は、大学卒 52.9%、短大卒 16.6%、専門学校卒 15.5%、高校卒 9.1%、大学院卒 5.0%であり、直近の国勢調査 2010 年の 30 歳代の統計 (高校卒 40.7%、短大・高専卒 25.2%、大学・大学院 25.2%) と比較すると高学歴である。現在の働き

方は、専業主婦が 42.2%，育休・産休中が 17.4%，パート・アルバイトが 16.6%，フルタイムが 14.0% であり、平成 30 年版男女共同参画白書の専業主婦率 35% より高いが、有業率は育休・産休中を含めると 52.6% と全国平均と近い割合となっている。世帯年収は、400～600 万円が 25.1%，600～800 万円が 22.6%，200～400 万円が 12.6%，800～1000 万円が 11.7%，1000 万円以上が 8.7% であり、厚生労働省「平成 28 年国民生活基礎調査概要」のほぼ全国平均に近い世帯年収である。

2.3 調査時期

2018 年 10 月～11 月の期間に実施した。

2.4 分析方法

本研究でのアンケートは、兵庫県立大学の野津隆志教授と協同で作成したものである。3-1「母親としての自己認識」は、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の 3 件法で回答を求めた。それ以降の質問は、3 件に分類したグループごとに比較検討を行った。3-2「母親としての自己認識と自己評価」の相関分析は IBM SPSS Statistics 25.0 を用い Kendall の相関係数と有意確率（両側）を表記した。

3-5「母親認識と母親概念」、3-6「母親認識と育児行動」は、質問紙調査における自由回答などのテキスト型データの客観性を保持しつつ恣意性を排除し、計量的なテキストマイニングにより分析を行うことのできる Khcoder を用い行った。各群の傾向を探るため、特徴語の一覧を Jaccard の類似性測度が大きい順に上位 10 語を抽出した。解釈には、それぞれの語が原文でどのように用いられたのかを KWIC コンコーダンスにより確認しながら検証を行った。表 3「母親認識と育児行動の一覧表」は、アンケートから得られた 820 の自由記述をその分類と集約を通して記述内容を構造化するために適した K J 法を用いて分類し、カテゴリー化を行い分析した。

2.5 倫理的配慮

アンケートの実施に際して、NPO 法人ママの働き方応援隊に研究の趣旨や個人情報の遵守などを説明し、内容を検討し承認を得て行った。Web 上でのアンケートには、調査の目的・倫理的配慮を記して無記名とし、回答はコンピュータで統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答しづらい項目については、「答えられない」の選択肢を追加したことを明記した。

3. 結果と考察

3.1 母親としての自己認識

「ご自身が本当の意味で母親になったと感じますか」との母親認識についての問いの結果が図1である。この問いの「本当の意味で母親になった」という母親の概念については、後述に各自の母親観に関する質問を行うため、あえて定義していない。

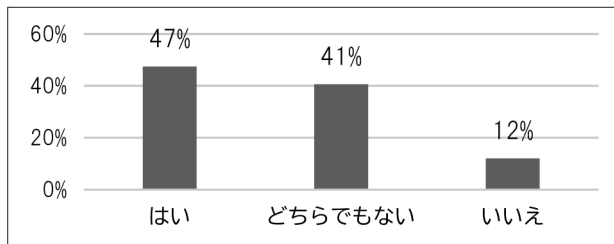


図1 母親としての認識

母親 820 名のうち、「はい」47% (389 名)、「どちらでもない」41% (333 名)、「いいえ」12% (98 名)と、一番多かった回答は「はい」であり、「本当の意味で母親になった」と認識している母親が約半数を占めていた。「はい」を選択した母親たちは、自分が描く理想の母親像と母親としての自身の姿を比較し、概ね大きな相違はなく許容できる範囲として自身を受容し母親アイデンティティを確立している。一方、まだその母親像に到達できておらず、母親として自己受容できていない母親が12%、41%の母親は、母親像に近づこうとしている自分に一定の評価をしているものの、まだ十分ではないと認識し、母親像がまだ確立していないと推察される。

3.2 母親としての自己認識と自己評価

「あなたが母親であるご自身に点数をつけるとすれば何点ですか (100 点満点)」の回答を母親認識「はい」「どちらでもない」「いいえ」ごとに集計したものが図2である。

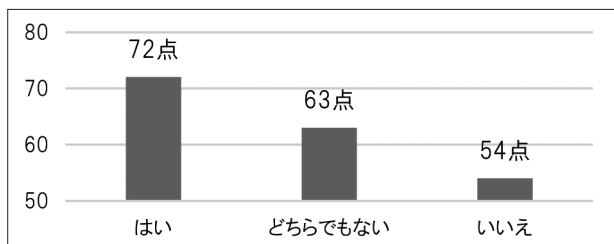


図2 母親認識と自己評価

母親認識「はい」の母親が72点、「どちらでもない」63点、「いいえ」54点であり、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の間には9ポイントずつの差が認められた。「母親としての自己認識」と「母親としての自己評価」の相関係数は、($r=.271$, $p<.001$)であり、弱い正の相関が認められた。また、全体の平均が66.2点、最低点0点、最高点100点であったが、最頻値が50点、2番目に多かったのが80点であった。平均から、自身に及第点を与えている母親が多い一方、50点以下の母親が29%おり、「いいえ」を選択した母親は12%であったが、母親であることに自信が持たず母親アイデンティティを確立しにくい者も一定数いると推察する。

3.3 母親認識と第一子の年齢

母親認識ごとに第一子の年齢グループに占める割合をグラフにしたものが図3である。第一子の年齢ご

とのグループ人数は、「0歳」49人、「1～2歳」192人、「3～5歳」369人、「小学生」166人、「中学生」21人、「高校生」9人、「それ以上」14人である。母親認識ごとの最高値を□、最低値を○で囲み表記した。

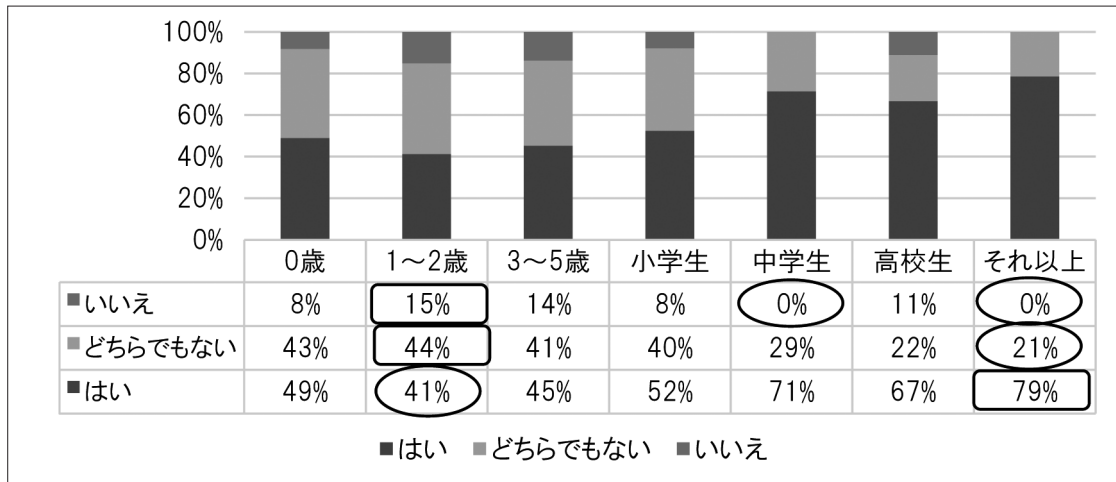


図3 母親認識と第一子の年齢

母親認識「はい」の母親が1番多くを占めた年齢グループは、「それ（高校卒業）以上」の79%、1番低かったのは「1～2歳」の41%であった。「どちらでもない」を選択した母親は、最高値が「1～2歳」の44%、最低値が「それ以上」の21%、「いいえ」の最高値も「1～2歳」15%、最低値は「中学生」「それ以上」の0%であった。子どもの年齢があがると「はい」を選択する割合が高くなり、「どちらでもない」「いいえ」は、子どもの年齢が下がると割合が高くなる傾向が認められた。「はい」の母親が50%以下だったのは、第一子の年齢が「1～2歳」41%、「3～5歳」45%、「0歳」49%であり、就学前の子どもの母親の母親認識が低い結果となった。0歳は、「はい」が49%と、出産を体験し、乳児を育てている間は母親認識が高いが、子どもが幼児期になると母親認識が低下することが示唆された。一方、中学生以上になると「はい」の割合が高くなり、「中学生」71%、「高校生」67%、「それ以上」79%であり、中学生以上で「いいえ」を選択した母親は、「高校生」の1名のみであった。母親達は、概ね子どもの年齢の上昇に合わせ母親役割を受容しているが、小学生と中学生の間には「はい」を選択した割合に19ポイントの差があり、第一子が中学生以上になると、母親役割を受容し母親アイデンティティの形成に繋がる母親が増加することが認められた。

3.4 母親役割受容までの期間

母親認識「はい」の母親が母親役割を受容するまでの期間を、第一子誕生からの年数で表したものが図4である。

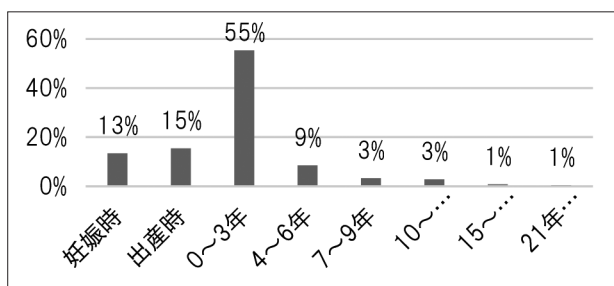


図4 母親役割受容までの期間

「本当の母親になった」と感じた時期が、妊娠時、出産時といった身体的母親になった時期であると捉えている母親は、「はい」と回答した母親のうち28%で、全母親の14%であった。「本当の母親になった」と認識した時期は、0歳から3歳までが最頻値55%であり、妊娠時、出産時を含め、第一子が3歳になるまでに母親になったと認識する母親が83%（全母親の40%）であった。就学前の4～6歳までを入れると、「はい」を選択した母親のうち92%（全母親の44%）が、小学校入学までに母親として自己受容するようになっている。一方で、小学校入学時に母親受容できていない母親が56%と半数以上おり、「3.3 母親認識と第一子の年齢」と合わせて検討を行うと、母親役割を受容する時期は、妊娠、出産、0～3歳児という自身の体調や生活様式の変化への柔軟な対応が求められる時期であり、日々の対応に試行錯誤することで母親認識は醸成されている。しかし、7割以上の母親が母親認識を受容し「いいえ」を選択する母親がいなくなるのは中学生以上であり、母親アイデンティティの醸成期間には個人差があることが示唆された。

3.5 母親としての自己認識と母親概念

「本当の母親になったと感じた時、又は本当の母親になるとはどうなることか」という母親概念についての自由記述を、母親認識「はい」「どちらでもない」「いいえ」ごとに、Khcoderを用い、特徴語のJaccard係数の類似性測度が大きい順に上位10語を抽出した結果が表1である。

表1 母親としての認識と母親概念

	はい	どちらでもない	いいえ
自分	.258	母親 .248	母親 .102
子ども	.241	思う .215	子供 .098
子供	.238	本当 .151	本当 .090
感じる	.177	意味 .139	意味 .088
考える	.171	分かる .112	考える .072
優先	.136	成長 .083	子育て .057
守る	.100	自立 .056	自立 .052
子	.088	持つ .050	持つ .051
見る	.066	今 .049	人 .047
大切	.063	子育て .044	出来る .040

この結果をもとに、母親としての認識ごとにストーリーラインを描くと、以下のようになった。「はい」と回答した母親は、母親概念を「自分」が「子ども（子供）」を「見て」、「大切に」感じ、「子」の思いを「自分」の思いよりも「優先」し「守る」ことだと理解している。記述例として、「自分より子供の都合、希望を優先させる。」「子供の笑顔などが一番幸せを与えてくれると感じたとき。」「天災の時など自分のことより子供の（命にかかわること）を守ろうとする行動がとっさに出る時」といった、母親というものを日本古来の「自身のことよりも子どものことを優先する無償の愛情を注ぐ母親像」とであると概念づけている。一方、「どちらでもない」を選択した母親は、「本当」に「母親」になるという「意味」が「分か（る）らず」、子どもが「成長」し「自立」した時にその意味が理解できるのであり、「今」ではないと認識している。32%の母親が「まだ分かりません。日々模索中です。」等、母親概念の形成に至っていない。他の記述例として、「子供が大人になった時に、子供が自分の事を母親として感謝してくれたら、それで初めて母親になれると思います。」「私が決めることではなく、こどもたちが決めることと思う。」といった、母親になったかは自己判断ではなく、子どもが成長したときに母親としての自分を受容してもらえるかといった他者判断「子どもからの承認」として認識している。「いいえ」のうち、「本当」の「母親」になる「意味」が分からないと記述した母親は18%で、「自立」して初めて「本当」の「母親」になり、「子供」を優先「出来る」

ことと認識している。記述例として、「子供が立派に巣立ってやっとな母親だったと実感するのはと思うため。」「ちゃんと自分の中に芯があること。～(ぶれていない)」と、子どもが成長することで、自身も成長していくのだと感じている。

母親認識「はい」の母親は、「自分より子どもを優先させる無償の愛の母親像」、「どちらでもない」は、母親の概念が描けておらず自己承認欲求の高い母親、「いいえ」は、「無償の愛の母親像」を持ちながら自身がそこに至っておらず、子どもの成長とともに自身も成長していく途上と捉えている。

3.6 母親認識と育児行動

表2 母親認識と育児行動の特徴語

はい		どちらでもない		いいえ	
自分	.141	人	.175	人	.085
挨拶	.070	教える	.080	育てる	.059
地域	.057	社会	.070	伝える	.057
経験	.050	子ども	.068	社会	.056
子供	.048	伝える	.064	教える	.056
気持ち	.047	挨拶	.064	参加	.055
見せる	.045	たくさん	.056	地域	.047
一緒	.044	経験	.051	持つ	.044
思う	.044	関わる	.044	気持ち	.042
機会	.044	色々	.044	子供	.039

「子どもが社会の一員として育つために、母親としてどのようなことをしていますか（してきましたか）」の育児行動に関する自由記述を、母親認識ごとに特徴語を抽出した結果が表2である。母親認識ごとの特徴的な育児行動を□で囲み表記した。

グループごとに描いたストーリーラインは以下の通りである。「はい」と回答した母親は、「自分」が「地域」と関わり「挨拶」する姿を「見せる」「機会」を作り、「子ども」と「一緒」に「経験」し、「子ども」の「気持ち」を受け止めている。「どちらでもない」を選択した母親は、「子ども」に「社会」の常識を「教え」たり「伝え」、「子ども」が「たくさん」の「人」と「関わる」「経験」をさせている。「いいえ」を選択した母親は、様々な「人」と接し、「人」に「気持ち」を「伝え」られるよう躰け、「社会」のルールを「教える」ことを母親役割と捉えていた。

特徴語の1位は、「はい」が「自分」である一方、「どちらでもない」「いいえ」が「人」であった。「はい」を選択した母親は、「自分が生き活きと楽しく仕事をする姿を見せるようにしている。」「自分の意見を持つこと。自分らしく生きること。」と自分(母親)や自分(子ども)自身に焦点を当て、主体的、自律的に考え行動している。一方、「どちらでもない」「いいえ」を選択した母親は、「色々な人と関わる機会をつくること」「自分がされたくないことはしない、人の気持ちを考える、と教えている。」「他人に迷惑をかけない、約束を守れるように。」「人としての良い悪いを教えること」と、他者を意識し他者との関係を壊さない他律的な記述が多く認められた。

表3 母親認識ごとの育児行動

対象者	上位 カテゴリー				下位カテゴリー			
		はい	どちら でもない	いいえ		はい	どちら でもない	いいえ
子どもへの 援助	経験値の上昇	29.9%	37.2%	29.9%	人と関わる経験を増やす	22.6%	30.8%	23.9%
					多様な経験をさせる	5.9%	5.9%	4.5%
					親子での経験	1.4%	0.5%	1.5%
	社会性の育ち	28.5%	27.9%	24.6%	挨拶	9.8%	9.6%	6.7%
					ルール・マナー・しつけ	9.1%	9.8%	8.2%
					他人への思いやり 人の役に立つ	5.7%	4.1%	4.5%
					感謝する	1.8%	0.2%	0.7%
					されてイヤなことはしない 迷惑掛けない	0.8%	2.7%	2.2%
					多様性理解	0.8%	0.5%	0.7%
					周囲に頼る・慣れる	0.6%	0.0%	0.7%
					友達大切に	0.0%	0.9%	0.7%
	自己発揮	9.8%	8.0%	5.2%	自己主張できる	2.8%	1.6%	0.7%
					自立を促す	2.6%	3.4%	2.2%
					生きる力を育む	2.2%	0.2%	0.7%
					自己決定・自己判断の尊重	1.6%	2.7%	1.5%
	環境づくり	2.0%	0.7%	0.0%	より良い保育所・幼稚園探し	1.0%	0.7%	0.0%
					安心できる居場所づくり	1.0%	0.0%	0.0%
	命を守る	1.6%	2.3%	4.5%	健康・療育	0.6%	0.9%	0.7%
					衣食住	0.8%	1.1%	3.0%
					安全保持	0.2%	0.2%	0.7%
受容的援助	13.8%	11.6%	9.7%	意思尊重	4.9%	2.1%	3.0%	
				愛情表示	4.7%	3.9%	3.7%	
				受容・信じる・待つ	3.7%	5.0%	3.0%	
				側面的援助	0.4%	0.0%	0.0%	
教育的援助	2.0%	2.5%	17.9%	納得できる説明	0.0%	0.7%	0.0%	
				お手伝い	0.8%	0.2%	2.2%	
				読み聞かせ	0.8%	1.1%	1.5%	
				教える・教育	0.4%	1.1%	14.2%	
何もしない	1.4%	2.5%	4.5%	何もしない	1.4%	2.5%	4.5%	
母親自身 の姿	生き方モデル	5.7%	4.1%	2.2%	生き方のモデル	5.7%	4.1%	2.2%
	社会との接点	3.3%	0.0%	0.0%	母親の社会との関わりを増やす	3.3%	0.0%	0.0%
	子育てに対する 姿勢	1.4%	0.5%	0.0%	子育てを楽しむ	1.0%	0.2%	0.0%
					子育ての勉強・情報収集	0.4%	0.2%	0.0%
	自己充実	0.2%	1.8%	0.0%	自身の自立	0.2%	0.0%	0.0%
	その他	0.4%	0.9%	1.5%	自由でいる・生活を楽しむ	0.0%	1.8%	0.0%
その他					0.4%	0.9%	1.5%	

母親認識ごとの育児行動についての820名の自由記述を分類集計し、上位カテゴリーと下位カテゴリーに分け、結果を一覧に表記したものが表3である。以下は、上位カテゴリーを【】、下位カテゴリーを《》として記述し、特徴的な結果を網掛けにしている。

子どもへの援助で、すべての母親に一番多かった回答は、「なるべく色々な経験をさせたり、多くの人と関わるように。」といった、【経験値の上昇】（「はい」29.9%、「どちらでもない」37.2%、「いいえ」29.9%）であった。本研究の対象者の母親たちが、赤ちゃんを通して社会とつながるボランティアグループのメンバーであるということが大きな要因であると思われるが、《人と関わる経験を増やす》という人的環境からの学びが子どもの成長に効果的であると認識している。次に多かったのが、《挨拶》や《ルール・マナー・しつけ》といった【社会性の育ち】（「はい」28.5%、「どちらでもない」27.9%、「いいえ」24.6%）であった。この【社会性の育ち】で、「はい」を選択した母親は、「感謝と思いやりを持って行動するよう伝える。自分のことは自分でい、困っている人には声をかけるようにする。」といった、《他人への思いやり》《感謝

する」といった項目の割合が高く、他者に対して自身が貢献するポジティブな積極的行動を行っている。「どちらでもない」「いいえ」に多かったのは、「されてイヤなことはしない・迷惑かけない」といった他者の視線を意識するネガティブな消極的行動であった。『子どもへの援助』において、母親認識「はい」の母親に記述が多かった項目は、「自己主張できる」や「生きる力を育む」といった【自己発揮】できる力を育むために、【環境づくり】や【受容的援助】といった側面的な援助に関するカテゴリーの割合が高かった。一方、「いいえ」を選択した母親は、子どもの年齢が低いこともあり【命を守る】といった《衣食住》に関する内容や【教育的援助】の記述割合が高く、「何もしない」を選択した割合が他のグループより高かった。

また、『母親自身の姿』においては、母親認識「はい」の母親は、「活動している背中を見せること。」「自分の意見を持つこと。自分らしく生きること。」といった、母親自身が《生き方モデル》となり、《社会との接点》を作っていくという、子どもにとっての環境としての関わりを行っている。「どちらでもない」は、母親自身が《自由でいる・生活を楽しむ》といった【自己充実】を目指して、自身に注目している記述の割合が高かった。一方、「いいえ」の母親は、『母親自身の姿』に関する記述が少ないのが特徴であった。

4. まとめ

4.1 母親認識

「本当の意味で母親になっている」と、自身の描く母親像と母親としての自身を客観的に比較し、自身の母親アイデンティティを肯定している者は47%と約半数であった。出産を経験し子どもが乳児期の間は母親意識が高いが、子どもが幼児期になると母親意識が一時低下している。母親役割を受容する時期は第一子が0~3歳が一番多かったが、総合的に判断すると、妊娠期~第一子0歳までの乳児期に約半数(49%)が母親役割を受容している。妊娠から出産を経て自身の体調や生活様式に変化があり乳児への柔軟な対応が求められる時期に、子どもへの対応を試行錯誤することで母親意識は醸成されていると推測される。そして、概ね子どもの年齢の上昇と共に母親役割を受容する割合が高くなっているが、小学生と中学生の間には「はい」を選択した割合に19ポイントの差が認められ、第一子が中学生になると70%を超える母親が、母親アイデンティティを受容している。このことから、母親意識は、なだらかな成長を遂げるのではなく段階的な発達をしており、第1子が妊娠~1歳の時期に約半数、小学生から中学生になる時期に約2割、そして高校生以上の成人になることで、母親役割を受容していくことが明らかとなった。妊娠から1歳の時期では、子どもを授かり命を生み出したという母親としての喜びと達成感、周囲からの祝福、育児を頑張っている自分を承認するという形で母親役割を受容しており、小学生から中学生の時期では、物理的な子育てへの時間や手がかからなくなり、自身のこれまでの子育てを振り返り、今後の生き方を考える余裕が出てくる時期に、改めてこれまで行ってきた母親としての役割を受容し、母親意識が醸成されていると推察する。

4.2 母親概念

母親意識が醸成された母親は、母親というものを日本古来の「自身のことよりも子どものことを優先する無償の愛情を注ぐ母親像」と概念づけ、子どもを主体者として自分の思いよりも子どもの思いを優先し、子どもの成長を生き甲斐とする母親観を持っている。母親意識が形成される途上においては、母親になることでの制約感と育児の仕事量と責任から母親として子どもに尽くし生き甲斐とするという母性観を受け入れがたく、母親個人としてのアイデンティティとの葛藤がみられ、母親概念を模索している。そして、自

身が行っている母親としての行動が、子どもにとって正解であるのかという不安を抱き、現在の自分が母親として認められるのか自信がなく、子どもが成長した結果として、自身の育児を子どもに受容してもらえのかといった他者に判断を委ねたいと考えており承認欲求が高い母親像であった。一方、母親意識が醸成されていない母親は、母親観が描けておらず、子どもが成長し自身が母親として認知された時に母親としての自身を認められているという長期的視点に立ち、自身も母親として成長するという可能性を持ち、積極的、肯定的な意味を見出そうとする姿が認められた。そして、子どもの成長を優先し生き甲斐とする日本特有の母親としての役割だけでなく、自己実現も兼ね備えた新しい母親観を模索しようとする者も認められた。

4.3 母親認識による育児行動の変容

「3.6 母親認識と育児行動」の母親認識ごとの育児行動に関する自由記述を集計し、上位カテゴリーの増減を図示し、母親認識が「いいえ」から「どちらでもない」「はい」に変容する過程の特徴的な下位カテゴリーをグレーの網掛けで表したものが図5である。

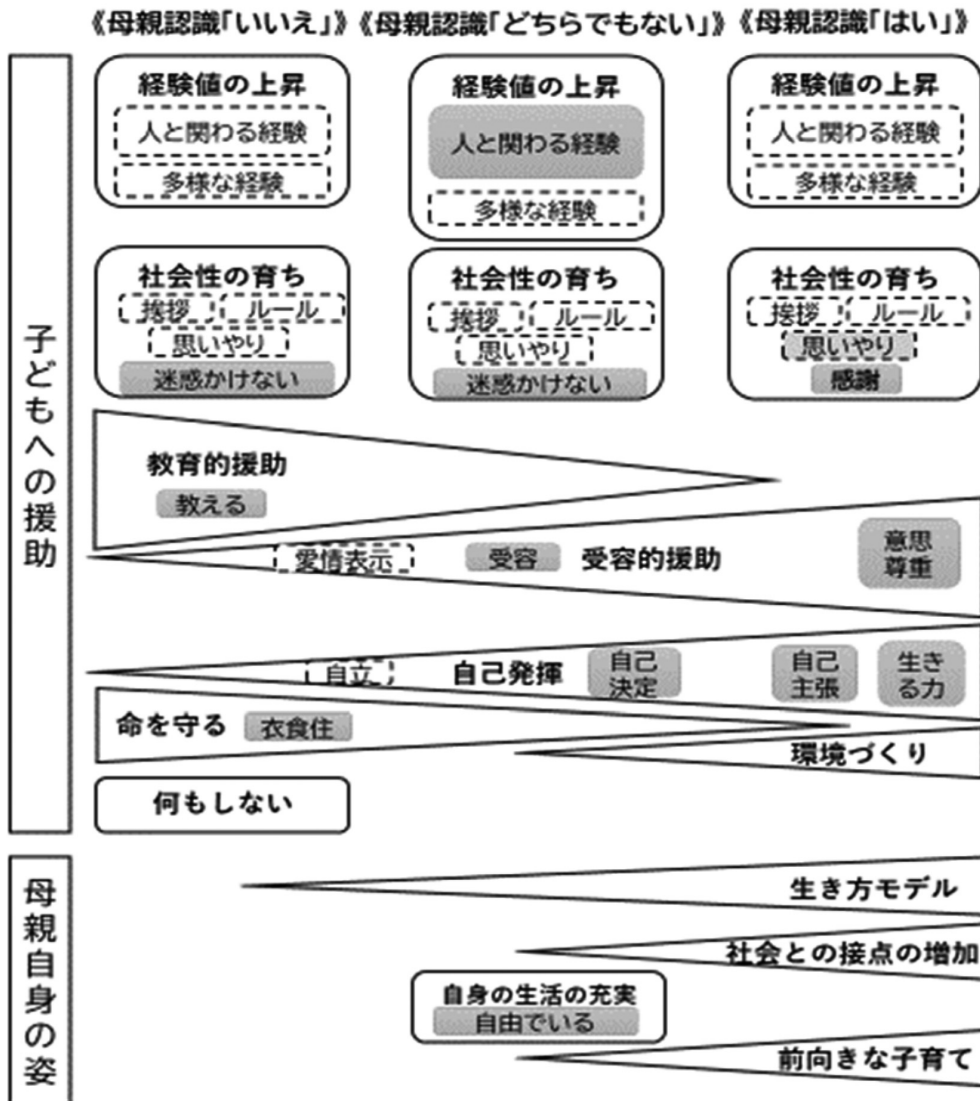


図5 母親認識による育児行動の変容

子どもが社会の一員として育つために必要なことは、母親認識に関わらず、多様な人や事と関わる【経験値の上昇】と、《挨拶》や《社会のルール》他者への《思いやり》といった【社会性の育ち】を身につけることだと捉えている。しかし、その【社会性の育ち】には、母親認識ができていない母親は、《迷惑かけない》といった他者の視線を意識し、ネガティブな動機づけにより喚起された、子どもに行動制限をかける他律的な行動規範をとっている。一方で、母親認識ができていない母親は、他者に《感謝》し、《他人への思いやり・人の役に立つ》といった、他者貢献の意識を育てることを重視し前向きで自律的な行動規範であった。また、母親認識ができていない母親は、子どもに【教育的援助】として《教える》ことを重視し、教育的な指示的援助をしている。そして、母親意識が醸成されるにしたがって、子どもの《意思尊重》をし、【自己発揮】として《自己決定》できるよう、《自己主張》することを良しとし、《生きる力》を育むための【受容的援助】を行うようになっていく。そして、幼稚園や保育所など子どもにあった保育環境を探し、家庭環境を整えるなどの【環境づくり】という間接的な援助をするようになっていく。

また、母親自身の姿として、母親認識ができていない母親は、子どもの社会性の育ちに繋がる行動に母親自身の行動を記述することは殆ど無く、自身だけでなく子どもに対しても【何もしない】と記述した母親もみられた。一方で、母親意識が醸成されるにしたがい、自身が【社会との接点の増加】を目指し、子どもの見本として【生き方のモデル】となるよう変容していきこうという柔軟さが認められ、自身が直接的に援助するのではなく、人的環境として側面的に援助しようとする意識を持っている。そして、《子育てを楽しむ》、《子育ての勉強・情報収集》を行う等、ポジティブで自己成長しようとする【前向きな子育て】をするようになっていく。これは、母親役割獲得の段階のうち、「母親が揺るぎないアイデンティティを持ち、子どもに寄り添い、母親役割を果たす能力があると感じる段階。アイデンティティの獲得」²⁵⁾の時期に当たると思われ、自己効力感を獲得したため自己評価が高かったと推察する。

母親認識をしていない母親は、子どもの命を守ることを第一義とし、未熟な準備期としての子ども観を持ち、子どもたちが社会に出る際に必要な規範や挨拶などを掛け教育し、他人に迷惑をかけないといった他者との関係を壊さないための他律的で指示的な援助を行っており、子どもを変容させることが母親の役割であると認識している。母親認識「どちらでもない」の母親は、「いいえ」と「はい」の両方の特徴を合わせた変容途上の援助を行っているが、自身より子どもを優先するという無償の母親概念ではなく、自分らしく生きたいと自由と自己充実を求めている。一方、母親意識が醸成された母親は、子どもを信じ、意思を尊重して受容し、他者と共存するための自律的で側面的な援助をするとともに子どもの生き方モデルとして、積極的に社会と関わりポジティブに自身も成長しようとする前向きな母親の姿であり、母親としての自己肯定感と自己効力感が高まり、母親としての自信を得て母親自身の成長が認められた。

今回の研究では、乳幼児ふれあい体験を自身の赤ちゃんと一緒にやっている母親を対象に検証したため、社会と繋がることが子どもの社会性の育ちに繋がるとの意識が高い母親であったと推察する。また、第一子の年齢が小学生以下の母親が多く、母親意識が醸成中である母親も多数であった。次回は、成人した子どもを持つ母親など、子育てが一段落した母親を対象に、子育てを振り返っての省察を検証していきたい。

本研究は、日本保育学会第73回大会での発表に、内容に加筆、再検討を加えたものである。

謝辞

本研究を行うに当たり、アンケートを協同で作成していただいた兵庫県立大学 野津隆志教授に、心より感謝申し上げます。また、アンケートに快くご協力いただきましたママの働き方応援隊のママ講師の皆さんにも心よりお礼申し上げます。

《引用・参考文献》

- 1) 梅棹忠夫, 金田一春彦, 坂倉篤義, 日野原重明: 日本語大辞典, 大日本印刷株式会社, 1990.
- 2) 山村賢明: 総括と展望 母のコンセプションの基本構造 日本人と母, 186-253, 東洋館出版社, 1971.
- 3) 岡本祐子: 女性の生涯発達とアイデンティティ, 北大路書房, 1999.
- 4) 岡本祐子: 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究, 風間書房, 1994.
- 5) 岡本祐子: 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究, 日本家政学会誌 Vol.9 : 849-860, 1996.
- 6) 柏木恵子, 若松素子: 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み—, 発達心理学研究, 5, pp 72-83, 1994.
- 7) 山口雅史: 親同一性を構成する3つの次元—幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造—, 家族心理学研究, 15, 79-91, 2001.
- 8) 柏木恵子, 若松素子: 「親となる」ことによる人格発達—生涯発達の視点から親を研究する試み—, 発達心理学研究, 5, pp 72-83, 1994.
- 9) 大日向雅美: 母性の研究, 川島書店, 135-169, 1988.
- 10) 中垣明美, 千葉朝子: 母親役割獲得支援に向けた産後3~4か月の母親の現在と妊娠中の思いおよび希望する支援の検討. 母性衛生 53(1) : 100-110, 2012.
- 11) 稲田千晴, 北川真理子: 産褥期の母乳育児をする母親の母親役割の体験. 日本助産学会誌 24(1) : 40-52, 2010.
- 12) 二川香里, 長谷川ともみ: 母親役割の概念分析, 日本看護研究学会雑誌 37 卷 3 号 3, 307, 2014.
- 13) 三澤寿美, 小松良子, 片桐千鶴: 初産婦の母親役割行動に関する研究—Reva Rubin の妊婦の母親役割獲得過程における概念を用いて—. 山形保健医療研究 7:
- 14) 前原邦江, 森恵美: 産褥早期の授乳場面において看護職者が母親役割行動の観察から行ったアセスメントの内容, 千葉看護学会誌 14(1), 98-106, 2008.
- 15) 盛山幸子, 島田美恵子: 妊娠先行結婚と妊婦の対児感情・母親役割獲得・夫婦関係との関連, 日本助産学会誌 22(2), 222-232, 2008.
- 16) 藤陽子, 山下倫実, 石田有理, 布施晴美: 夫婦における父親の育児行動評価と親アイデンティティ及び関係効力性との関連, 十文字学園女子大学紀要(50), 19-31, 2020.
- 17) 大澤直樹: 発達心理学における育児感情研究への家族社会的視点の導入—歩行開始期の親の育児感情と母親/父親の動機づけの差異の解明に向けて—, 京都大学大学院教育学研究科紀要 第66号, 83-96, 2020.
- 18) 多田彩加: 養育者の育児行動・育児感情・親イメージの理想と現実のギャップと父母間比較, 年報人間関係学(17), 27-42, 2014-12.
- 19) 佐藤淑子: 父親と母親の職業生活及び家族生活と家事・育児行動, 鎌倉女子大学紀要(19), 25-35, 2012.
- 20) 片山美穂, 北岡和代, 中本明世, 川村みどり, 森岡広美, 川口めぐみ: 抑うつ状態にある母親が子どもに感じる思いから辿る育児プロセス, 日本看護科学会誌 39(0), 174-182, 2019.
- 21) 山下倫実, 加藤陽子, 石田有理: 育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす影響に関する予備的検討: 父親の育児行動に対する評価に着目して, 十文字学園女子大学紀要 47, 25-36, 2016.
- 22) 中谷奈津子, 森田美佐: 育児をめぐる迷惑意識が母親の育児行動に及ぼす影響—行為者側からみた公共の場における社会的迷惑—, 大阪府立大学紀要. 人文・社会科学, 62, 1-15, 2014.
- 23) 池田隆英: 母親による乳幼児への「子育て状況」の要因分析: 育児の「ストレス反応」と「子育て姿勢」の影響, 母性衛生 51(4), 578-585, 2011.
- 24) 加藤明美, 山口桂子, 服部淳子, 小塩真司: 母親のストレスと育児行動の研究(第1報):—育児ストレスと不適切な育児行動の因果モデルの検討—, 日本看護研究学会雑誌 32(3), 3_370-3_370, 2009.
- 25) 二川香里, 長谷川ともみ: 母親役割の概念分析, 日本看護研究学会雑誌 37 卷 3 号 3, 307, 2014.